

日本古代における 王宮構造の変遷

とくに前期難波宮と飛鳥宮を中心として

Transitions of Royal Palace Construction in Ancient Japan :
Focusing on the Former Naniwa Palace and Asuka Palace

林部 均

HAYASHIBE Hitoshi

はじめに

- ①前期難波宮の発掘調査
- ②飛鳥宮の発掘調査
- ③前期難波宮と飛鳥宮Ⅲ期遺構
- ④前期難波宮・飛鳥宮の歴史的位置
- ⑤前期難波宮・飛鳥宮をめぐる今後の課題

【論文要旨】

前期難波宮は孝徳の難波長柄豊碓宮（651年～）、飛鳥宮Ⅲ-A期は斉明・天智の後飛鳥岡本宮（656年～）、飛鳥宮Ⅲ-B期は天武・持統の飛鳥浄御原宮（672年～）であることが確定している。すなわち、発掘調査で明らかとなった遺構から前期難波宮から飛鳥宮Ⅲ-A期、そしてⅢ-B期とその変遷を比較しつつ、分析することができる。本稿では、その変遷の過程で、何が変わるのか、また、変わらないのかを具体的に抽出し、その意味するところを考えた。

前期難波宮では、内裏とその南に巨大な朝堂が配置される。飛鳥宮には、内裏は規模を縮小するものの継承されるのに対して、朝堂は、まったく同じかたちでは継承されない。前期難波宮の朝堂は、後の藤原宮といった律令国家の王宮に同じかたちをしたものが採用されるので、前期難波宮のもつ先進性、画期性と評価できる。いっぽう、飛鳥宮で巨大な朝堂が造営されないのは、前期難波宮での急進的な政治改革に対する揺り戻しであり、もともとの大王の宮への回帰であると考えた。

いっぽう、飛鳥宮Ⅲ-B期になると、内裏の中心殿舎はそのまま、新たに「大極殿」とよばれる殿舎が造営される。「大極殿」は藤原宮で王宮の中心殿舎として採用されるので、この点は、律令国家の王宮につながる新しい要素と考えた。

前期難波宮、飛鳥宮では、王宮中枢の周囲に外郭ともいえる空間が成立する。ただ、ともに、その王宮中枢は、その中軸線上には配置されず、王宮の外郭そのものも不整形であった。律令国家の王宮と比べると、外郭という新しい要素が成立しつつあるが、いまだその整備は十分ではない。また、外郭には王宮での実務を支えた官衙が配置された。しかし、前期難波宮、飛鳥宮Ⅲ-A期ともに、それほど多くの建物が配置されていたわけではない。飛鳥宮Ⅲ-B期になると、比較的、官衙が整備されるようになり、それが藤原宮に継承され、王宮の中に統合されることになる。王宮を支えた官衙の様相も、新しい要素として導入されつつも、いまだ未成熟な部分を残すと考えた。

本稿では、こういった王宮の比較分析を踏まえ、前期難波宮と飛鳥宮を律令国家形成期の古い要素と新しい要素が混在する、まさに過渡期の王宮であると評価し、日本古代の王宮変遷の中に位置づけた。

【キーワード】 前期難波宮、飛鳥宮、藤原宮、律令国家、王宮構造